うちやまつり

深津篤史

登場人物

鈴木さんの息子さん
佐藤さん
佐藤さんの奥さん
山本さん
山本さんの娘さん
山田さん
藤原さんの奥さん
田中さん
田中さんの妹さん
前田さんの娘さん
高木さん
松田さんの息子さん
上田さんの奥さん

小鳥がさえずっている。木々のあいまから時折り姿を見せるそれは、淡いグリーンの色彩。と言ってもメジロの類ではなく、南方の鳥を思わせる。空は穏やかに晴れ渡り、マンションの影が黒くこの小さな空き地に落ちている。背の低い柵でおおわれた小さな空き地。囲むようにベンチが数台。柵の中にも椅子が数脚。中古の自転車……。キャッチボールをする男女。前田と高木。テレビ番組の音声が漏れ聞こえる。
鈴木が口笛を吹きつつ現れる。

開演。

第一幕　一月三日　午後二時

高木　あ、どうも。

鈴木、軽く会釈する。

前田　こんにちわ。
鈴木　こんにちは。
前田　あけましておめでとうございます、やったっけ。
高木　そうそう。

前田、少し笑う。

前田　うち戻る？
高木　よし。
前田　どう？
高木　バッチリ、回復。
前田　スケベやわあ。
高木　君もやんか。
前田　酔い覚めた？　って聞いたんよ。
高木　ウソばっかし。

佐藤、コンビニの袋を持って現れる。

佐藤　やあ、こんにちは。

前田　こんにちわ。

高木も会釈する。

高木　あけましておめでとう。

前田　ああ、そっか。

二人、退場する。

佐藤　いい天気ですね。

鈴木　あ、あけましておめでとうございます。

佐藤　ああ、あけましておめでとうございます。

やや間。

佐藤　ああ、これ、年賀状出しに行った帰りに、ね。タバコにビールにサキイカ、ベビーサラミ、カニ缶。少し奮発しましてね。ははは。寝正月です。

鈴木　はい。

佐藤　家内が実家に帰ってましてね。まことに、お恥ずかしい。あ、いや、正月ですから、そういう訳で。ははは。年始の挨拶ってのも、夫婦二人でって決まったもんでもないでしょう。うちは個人のプライベートですか、優先しようって訳で。ははは。いや、仕事が忙しいもんですから息抜きっていいますか。

鈴木　はい。

佐藤　いや、先程のご夫婦みたいなのもいいもんですが、ま、私らにとっては遠い昔のもんです。ははは。まことに面目ない。いや、そういう訳でもないんですが、いや、新婚さんですか。どう思います。

鈴木　え。

佐藤　いや、今の二人、夫婦者って決まった訳でもないでしょう。それとも何ですか、知り合いか何かで。

鈴木　あ、いえ。

佐藤　おたくも新婚さん。

鈴木　いえ、一人です。

佐藤　一人暮しをなさってる。そりゃまた大したもんだ。うち、うちはね、共稼ぎです。将来の事もありますからね。いや、まだ子供がいる訳じゃ

ないんです。いや、ははは。作らないって事で、近いうちにはって考えてるんですけどね。

鈴木　はい。

佐藤　本当ですよ。

鈴木　ええ。

佐藤　ここ、一人じゃ広いでしょう。まあ、広いにこした事はありませんが。いや、いつかは引っ越そうとは考えてるんですがね、まだまだ、三十になったばかりでして。あ、老けて見えますか。

鈴木　いえ。

佐藤　B棟にお住まいですか。あそこは確か、一部屋少なかったはずですが。ああ、なんだ、そういう訳ですか。ところで、あなたは、どういう仕事をしてらっしゃるんで。いや、ははは。初対面の方に失礼ですね。

鈴木　……。

佐藤　いや、私、酔ってるんです。正月ですからね。明日は仕事始めって訳でして。ははは。まことに申し訳ない。いや、申し訳ないって事もないですね。仕事してたら申し訳ないなんてね、おかしな事です。

鈴木　……。

佐藤　おかしいですね。これ、差し上げます。

と、スナック菓子を渡す。

鈴木　あ。

佐藤　ここじゃなんですからって、お誘いするのも変ですよね。私と貴方はお互い初対面な訳ですし、旧来の友人って訳じゃない。お隣さんって訳でもない。お隣さんっていえば、うちの階、どうやら住人は私らだけみたいでして。ははは。公団の見積り違いってやつですか。ははは。私ら貧乏クジ引かされた訳ですよね。

鈴木、少し笑う。

佐藤　ああ、貴方もそう思います。しかしですね、駅からはそう遠くない。住人が少ないのも考えようによっちゃあ、静かでいい。家賃だって、他より割り増しって訳でもない。ただ、駅前スー

パーが閉店するって聞いた日にゃあ、少々腹は立ちましたよ。けど、全体で見りゃあ、フィフティフィフティってもんです。日当りもいい。うちの部屋はですよ。ここはまあ、日当りは最悪ですが、別にこの空き地に住んでる訳じゃない。知ってますか。ここ、集会所が出来るはずだったんです。

鈴木　ええ。

佐藤　今じゃ何て呼ばれてるか知ってます？

鈴木　……。

佐藤　「こやまさんちのにわ」って。家内から聞いたんですがね。知ってますか、小山さん。

鈴木　いえ。

佐藤　ほら、あのあたり、手入れされてるでしょう。あれ、小山さんがやってるんだって、もっぱらの評判です。あ、いや、今は冬ですからね。もちろん何にもありゃしません。秋口の頃、何だっけかな、赤い、こう、いや、私は草花なんて、とんと知りませんので。しかし、ええ、覚えてます。真っ赤な、ええ、なんだかこう、嫌な気分になったのを覚えてますよ。どうしてかって、いや、真っ赤なんです。ありきたりですかね。ははは。

鈴木　……。

佐藤　そう言えば、インコの墓があるとか、ないとか。まあ、どうでもいい事なんですが、小さなお墓があったらしいんです。

と、田中（姉妹）が通りかかる。

田中（妹）　こんにちわ。

佐藤　やあ、こんにちは。

田中（妹）　ここ、入っちゃいけないんですよ。

佐藤　いやあ、ははは。

田中（妹）　「こやまさんちのにわ」ですか。

佐藤　ええ。

田中（妹）　お墓踏んだらバチ当たりますよお。

佐藤　いやいや、ははは。

田中（姉妹）、通りすぎる。

佐藤　ほら、有名でしょ。

鈴木　ええ。

佐藤　最近、越してらした？　いや、私もね、つい、二年前ですか。社宅に住んでたんですがね、こっちに、去年の春。いや、物騒でしょ。寝屋川に住んでたんですがね。二年前と言えば、ほら、発砲事件。だから関西は好きじゃありません。あ、関西の方ですか？

鈴木　ここ、昔、神社があったんです。小さな。

佐藤　ここに？

鈴木　そこに鳥居がありました。

佐藤　そりゃまた。

鈴木　何ですか。

佐藤　神聖な場所という訳で。ところでそれ、小山さんは知ってるんですかね。知ってて、インコだかを埋めて。いや、理にかなっているというか、なんというか。ははは。じゃあ、こういったゴミを捨てるのは良くありませんね。いや、私じゃありませんよ、もちろん。はは。貴方に弁解する必要もありませんね。貴方は何かここに埋めましたか。

鈴木　いえ。

佐藤　私もです。うちじゃ何も飼ってませんからね。ペットというのは、どうも、なんですか、死ぬでしょう。やっぱり。

鈴木　ええ。

佐藤　死ぬのはね、ごめんです。私も、貴方も、ペットも。そうでしょう。できれば、そんな事は考えずに済ませたいもんです。そうでしょう。

鈴木　……。

佐藤　ほら、小鳥が鳴いている。いや、また、おめでたい色をしていますね。あれは、何でしょう。

鈴木　あれは、

佐藤　いや、おめでたい。静かな、午後です。なんとも気持ちのいい。

鈴木　インコじゃないですか。

佐藤　そりゃありえません。インコは南の鳥でしょう。ここは日本で、それに冬です。お正月ですよ。

と、山本と山本（娘）が通りかかる。

山本　佐藤さんやないですか。

佐藤　は。

山本　いや、あけましておめでとうございます。

佐藤　ええ、あけましておめでとうございます。

山本　九〇四の山本です。同じ階の。

佐藤　ああ、ああ、はい。

山本　奥さん、里帰りなさってるそうで。今夜は独身時代に戻った気分で一杯ですか。

佐藤　いやあ、ははは。まことに、お恥ずかしい。寝正月です。食っちゃあ寝、飲んじゃあ寝、という訳でして。いや、申し訳ない。

山本　はは、うらやましい。

佐藤　ははは。同階のよしみでちょっと一杯どうですか。

山本　家内が待っとりますよって。はは、これですわ。（と、角（つの）を出すジェスチャー）どうする、お前。

山本（娘）、首を振る。

山本　ほな、お父さん先戻るよって。

山本（娘）　うん。

山本　早よ、帰っといでや。

山本（娘）　うん。

山本、去る。

山本（娘）、佐藤を見、鈴木を見、山本の去った方向を見る。

山本（娘）　うそばっかし。

佐藤　あ、いや、そう言えばそうです。山本さん。ははは。いや、私、帰りが遅いもんですから、てっきり、うちだけだと。そうですか。はは。いや、家内から聞いたんですがね。山本さん、お若い奥さんをお持ちだって。ははは。娘さんですか。いや、しかし、お父さん、実にお若く見えますが。

山本（娘）　三十二。

佐藤　じゃあ、君は。

山本（娘）　十四。

佐藤　学生結婚というやつですか、いや、うらやましい、全く。私、学生時代はとんと女に縁がなくて。貴方はどうでしたか。ねえ、鈴木さん。

鈴木　え。

やや間。小鳥がさえずっている。

佐藤（時計を見て）そろそろ池田屋事件が終わりますね。ははは。テレビ大阪。『坂本龍馬』ですよ。小学生の時分にね、ＮＨＫの幕末物。何でしたっけ、池田屋事件、嫌いなんです。他はどうという事もないんですが。幕末ものは好きでしてね。しかし、子供心にね、何でだかわかりませんが、嫌いなんです。ははは。じゃあ、そろそろ戻ります。これから龍馬が活躍しますからね。

鈴木　ええ。

佐藤、去る。

山本（娘）連れ子やねん。

鈴木　え。

山本（娘）うち。

鈴木　ああ、そう。

山本（娘）あの人、奥さんとようケンカしてんねん。

鈴木　ふうん。

山本（娘）大体、奥さんの声しか聞こえへんけど。

鈴木、少し笑う。

山本（娘）鈴木さん、いうの。

鈴木　ああ、うん。

山本（娘）鈴木さん家（ち）の息子さん。

鈴木　あ、ああ。

山本（娘）ふうん、そうかあ。

鈴木　僕の事、知ってるの。

山本（娘）うん。一時、有名やったから。

鈴木　うん。

山本（娘）思ったより、普通やん。

鈴木　そうかな。

山本（娘）うん、なんか。

鈴木　何。

山本（娘）ちょっと、がっかりやな。

鈴木　そう？

山本（娘）おもろないなあ。（空き地に寝転がる）

やや間。小鳥のさえずり。

鈴木　汚れるよ。
山本(娘)　ええねん。
鈴木　うん。
山本(娘)　空、青いなあ。
鈴木　うん。
山本(娘)　なあ、ほんまにやってへんの。
鈴木　ああ。
山本(娘)　ほんまのところは。うち、誰にも言わへんし。
鈴木　やってないよ。
山本(娘)　そうかあ。うち、聞いてみたかってんけどなあ。
鈴木　何を。
山本(娘)　済んだあと、どんな気持ちになるもんなんか。
鈴木　やってないからわかんないよ。
山本(娘)　まーくんがな、
鈴木　え。
山本(娘)　まーくんて、私の友達。同い歳やねんけどな、もう五十人くらいやってんねん。
鈴木　え。
山本(娘)　はは。人殺しとちゃうで。エッチや、エッチ。五十人くらいやるとな、肉やって、肉の塊。オナニーの方が気持ちええ言うとった。
鈴木　そんなもんかな。
山本(娘)　うちも肉って聞いてみたら、まあ、そやな、て言うとった。失礼や思わん。
鈴木　うん。
山本(娘)　人、殺すんもそんなもんなんかな、て思て。
鈴木　……。
山本(娘)　せやったら、やっぱり、考えてる時の方が楽しいんやろか。実際やるより気持ちええんやろか。せやったら、世の中平和やな。うん。思わん。
鈴木　ああ。
山本(娘)　ああ、やっぱ考えとくだけにしとったら良かったて、後悔するんかな。
鈴木　うん。
山本(娘)　罪のイシキとかやなくて、なあーんや、て言うの。そんな気持ち。ああ、あかんわ。

鈴木　何。

山本（娘）　まーくんかて五十人やって悟ってんもんな。
　ベテランにならんとわからんわな。

鈴木、少し笑う。

山本（娘）　普通はまさかそんなはずはないって思うんやろな。でもってもっかいやってみようとか思うんかな。

鈴木　それから。

山本（娘）　（少し笑って）鈴木さん、三人やったっけ。

鈴木　だから違うって。

山本（娘）　（鈴木を見つめて）うん。

鈴木　何。

山本（娘）　ちょっとええかもしれんな。

鈴木　何。

山本（娘）　黙ってるとそれっぽく見える。

鈴木　だから、

山本（娘）　（さえぎって）想像してみて。

鈴木　え。

山本（娘）　せやから、想像してみて。

鈴木　……。

山本（娘）　どんな気分？

鈴木　……。

山本（娘）　気持ちええもん？

鈴木　……。

山本（娘）　私な、人から首すじきれいやてようゆわれるねん。ほら、どう思う。私は、私はな、けっこう気に入ってるねん。なあ、つるつるやろ。色白いやろ。静脈が青く、すけて見えるやろ。うち、よう首に出されるねん。なあ、いきそうか。

鈴木　まーくんてさ。

山本（娘）　何。

鈴木　肉とやったことあるのかな。

山本（娘）　何、それ。

鈴木　だって、さっきの話じゃあ、まるでやったことあるみたいじゃないか。

山本（娘）　……そらそやな。

やや間。

山本(娘)　聞いてみたら良かったな。
鈴木　(少し笑って)何て。
山本(娘)　例えて言うなら何？　牛、豚、鶏、馬、羊、兎、猿、ろば、も食べ物？

鈴木、少し笑う。

山本(娘)　なんや、せつないなあ。
鈴木　うん。
山本(娘)　冬やからかな。
鈴木　うん。
山本(娘)　そうか。ええ天気やしな。
鈴木　ああ。
山本(娘)　今の誰か見とったらやばかったんちゃう？
鈴木　え。
山本(娘)　前歴もあることやし、危ないで。
鈴木　だから前歴なんて、ない、ない。
山本(娘)　まっ昼間からそれはないか。普通、隠れてやるわな。捕まえてくれゆうてるようなもんやもんな。

鈴木、少し笑う。

山本(娘)　一つ、わかってんけど。
鈴木　何。
山本(娘)　人殺すんはエッチとはまたちゃうと思うわ。
鈴木　え。
山本(娘)　死体はなんにも言わへんもん。けっこうスッキリするもんとちゃう。
鈴木　まだ疑ってるのかい。
山本(娘)　犯人、まだ捕まってへんし。
鈴木　……。
山本(娘)　怒った。
鈴木　いや。
山本(娘)　うちのお母さんな、四十三。ケショーしたらそれなりに見えるねん。けど、ケショー落としたらあかんな。使用前、使用後みたい。お父さんと結婚したんはうちが十二の時。二年前や。正直ゆうて四十一も四十三も一緒やろ。なんで結婚する気になったんかようわからん。だまされたんやな。

鈴木　……。

山本（娘）寝顔がな、ガメラに似てるねん。目ぇつぶったガメラ。うちは慣れてるし、愛敬ある顔やて言えん事もないけど、お父さんようびっくりせぇへんなぁ思て。

山本（娘）、笑う。

山本（娘）うちのお母さん、そこに埋まってる。死に顔もガメラそっくり。見てみる？　鈴木さん、笑わんといてな。

鈴木　……。

山本（娘）フキンシンかな。やっぱり。

鈴木　……。

山本（娘）びっくりした。なあ。

鈴木　ああ。

山本（娘）びっくりしたんやったら、もっとびっくりした顔しぃ。

鈴木　え。

山本（娘）表情乏しいから人殺しに間違われんねんで。

鈴木　そうかな。

山本（娘）ほら。

鈴木　ええと。

山本（娘）そこやで。

鈴木　え。

山本（娘）せやから、そこやでゆうたら、びっくりするねん。サスペンス劇場みたいに。

鈴木　ああ。

山本（娘）そこやで。

鈴木　え。

山本（娘）もっと目ぇむかんと。口も、開け過ぎ。ちょっと半開きにして。

鈴木　え。

山本（娘）あほみたいやな。ちょっと目の焦点ぼかしてみて。

鈴木　え。

山本（娘）あ、セクシーやな。

鈴木　ええと。

山本（娘）そのまま。

鈴木　え。

山本（娘）、鈴木にキスをする。

鈴木　あ。

山本（娘）　気持ち良かった。

鈴木　ああ、うん。

山本（娘）　お父さんと間接キスやな。

鈴木　え。

山本（娘）（笑って）今の顔、今の顔。

鈴木　……。

山本（娘）　ウソ。

鈴木　ウソ？

山本（娘）　うん、ウソ。

鈴木　何が？

山本（娘）（笑って）全部。

鈴木　全部って、

山本（娘）　全部。

と、高木が走ってくる。

高木　あ、どうも。

会釈して、行き過ぎようとして、戻って来る。

高木　すいません。

鈴木　はい。

高木　コンビニってあっちでしたっけ。

鈴木　ええ。

高木　どうも、すいません。

と、高木、走り去る。

シャッター音。山本（娘）が、鈴木を撮った。

山本（娘）　十一時になったら、また、ここに来て。

鈴木　え。

山本（娘）　人、殺したらやりたくなるってゆうやん。

鈴木　ウソなんだろ。

山本（娘）　うん。

山本（娘）、鈴木と指きりする。

山本（娘）「こやまさんちのにわ」で十一時。約束やで。

鈴木　ああ。

山本（娘）、走り去る。
すれ違いに山田。大きな鞄を抱えている。

山田　あ。
鈴木　え。
山田　あけましておめでとうございます。
鈴木　あけましておめでとうございます。
山田　……今年もよろしくお願いします。
鈴木　……こちらこそ、今年もよろしくお願いします。

やや間。

山田　何してらっしゃるんですか。
鈴木　あ、いえ。

やや間。

鈴木　あ、いや、別に。
山田　……「こやまさんちのにわ」ですか。
鈴木　ああ、はい。そうですね。
山田　ええと。
鈴木　邪魔ですか。
山田　いえいえ、そんな。

やや間。

鈴木　ご旅行ですか。
山田　いえいえ。
鈴木　はあ。
山田　どちらへ？
鈴木　いや、別に。
山田　ええと。
鈴木　はい。
山田　モラルとか、気にする方（ほう）です？
鈴木　は。いえ。
山田　ちょっと、向こう向いといてくれません。

鈴木が向こうを向くと、山田、鞄からゴミ袋を取り出し、置く。
と、向こうから佐藤（妻）が歩いてくる。

佐藤（妻）　あけましておめでとうございます。
鈴木　ああ。

山田、ゴミ袋を持って突っ立っている。

佐藤（妻）　ゴミ出しですか？

山田　ええ、はい。

佐藤（妻）　大変ですねえ。

山田　そりゃもう。

鈴木　あの。

佐藤（妻）　シッ。（山田と目を合わせ）ねぇ。

山田　ははは。

鈴木　あの。

佐藤（妻）、振り返る。非常ベルの音。やや間。

佐藤（妻）　火事？

山田　藤原さんやないですか。

佐藤（妻）　え。

山田　年末にほら、何度かイタズラあったやないですか。私、見たんですよ。藤原さんの奥さんが走っていくの。

佐藤（妻）　藤原？

山田　A棟の。

佐藤（妻）　お知り合い？

山田　いえいえ。

と、ベルが鳴り止む。やや間。

山田　あ、ほら。私、C棟の山田いいます。

佐藤（妻）　はい。

山田　いや、名前、名乗ってる訳やから、変な中傷とか、そういうんとちゃいますよ。陰口ゆうたらねぇ、匿名で、ゆうて、そんなんズルイですもんねぇ。

佐藤（妻）、少し笑う。

山田　藤原さんに会うたら言うてもろてかまいませんよ。

佐藤（妻）、少し笑う。

山田　いや、ほんまに。

佐藤（妻）　はい。

山田　これは、ナイショにしといてくださいね。

佐藤（妻）　ええ。それじゃあ。

山田　はい。
佐藤（妻）　やっぱり。
山田　は。
佐藤（妻）　火事やなかったみたいですねぇ。
山田　でしょ。

佐藤（妻）、行ってしまった。

山田　もう済んでるのに。
鈴木　え。
山田　私、しつこいんかな。どう思う？
鈴木　ええと。
山田　ごめん、ごめん。気にせんといて。あぁ、今の人知り合い？
鈴木　なぜ？
山田　なんか、知ってるふうに見えたけど。
鈴木　……。
山田　何？
鈴木　においませんか？
山田　え……。
鈴木　あ、いや、いや。
山田　私、臭いの？　何の匂い？
鈴木　山田さんは、
山田　何？
鈴木　すいません。ごめんなさい。今の話忘れてください。
山田　ちょっと待ってぇな。気になるやんか。
鈴木　いや、だから気にしないで、
山田　今の人、名前なんていうの？
鈴木　いや、知りません。
山田　知らんて君、知らんのに、そんなこと、
鈴木　山田さんの事言ってる訳じゃありませんから。
山田　ヒマやねん。
鈴木　は。
山田　藤原さん家（ち）ってなあ、あそこ。
鈴木　え。
山田　四階の、ほら、目玉吊ってるとこ。

鈴木、そちらを見る。

山田　四階で目玉吊ってるの、あそこだけやろ。
鈴木　……。

山田　家族で旅行中。奥さん実家帰ってるねん。
鈴木　だって、
山田　うん。そういう事。
鈴木　は。
山田　あほ、知り合いでもないのに、こんな団地で名前知ってる訳ないやん。
鈴木　ええと、
山田　君鈍いな。
鈴木　はい。
山田　（笑って）灯台下暗し、とか言うやろ。木は森に隠せとか。ちょっと違うかな。つき合っててん。ダンナさんと。ダイタンやろ。
鈴木　はあ。
山田　紅白はな、一緒に見てんで、うちで。一部だけやけど。
鈴木　はあ。
山田　知ってんねん。
鈴木　え。
山田　知っててこれみよがしに目玉なんか吊ってるねん。この辺ハトなんかおらんのに。
鈴木　インコじゃないですか。
山田　何。
鈴木　ほら、最近、多いじゃないですか、インコ、野性化したやつ。
山田　それもコミやねん。ああそうか。
鈴木　え。
山田　インコってさあ、オウム病？　やったっけ。持ってるねんよ。知ってる。
鈴木　はあ。
山田　人にうつるんは少ないらしいけどな、子供がかかると大変やねん。
鈴木　はい。
山田　赤ん坊とか、抵抗力ないからな。
鈴木　……。
山田　今、気ぃついたわ。ありがとう。
鈴木　え、どうして。
山田　自慢してるわけか。ははは。
鈴木　いや、僕はそんなつもりじゃ、
山田　で、君は。
鈴木　はい。

山田　さっきの話。気になるやんか。
鈴木　いえ、それは、
山田　初対面で人のこと臭いゆうたんやから。
鈴木　だから、その、
山田　君、いくつ？
鈴木　は？
山田　いや、とりあえず言いやすい所から始めよ思て。
鈴木　二十九です。
山田　あ、年上ですか。
鈴木　は？
山田　私、二十五なんです。
鈴木　はあ。
山田　お若く見えますねぇ、て、しゃべりにくいやんか。かまへん？
鈴木　はい。
山田　臭いの？　あの人。（少し笑う）
鈴木　いや、今日の事じゃなくて。
山田　何、何？
鈴木　ええと。
山田　あ、待ってな。私、人の噂話ベラベラしゃべりまくる女とちゃうからな。二十五歳。独身。おばはんと一緒にせんといてな。
鈴木　ええ。
山田　さっきのはあくまで私怨がからんでる訳やから、その辺、誤解せんといてな。
鈴木　こないだ、ジョウロ持ってたんです。赤い、小さな。ほら、子供がお風呂場で遊ぶようなやつです。
山田　うん。
鈴木　（指をさし）水、やってました。
山田　もしかして、
鈴木　え。
山田「こやまさん」か？
鈴木　ええと。

と、高木、ダッシュで戻ってくる。コンビニの袋を持っている。その中にあるのはどう見てもコンドームだ。

高木　あ。

鈴木　コンビニ、あったでしょう。
高木　いや、ははは。助かりました。ありがとうございます。この辺、不慣れなもんで。
鈴木　いえ。
高木　じゃあ。

と、高木、行ってしまった。山田、それを見ている。

山田　最中やってんな。
鈴木　はい。
山田　なんも走らんでもて思うけど。
鈴木　ええ。
山田　それで。
鈴木　え。
山田　さっきの話。

遠くで小鳥のさえずる声。
二人、ふと空を見上げる。

山田　インコかな。
鈴木　ええ。
山田　なんか変な話やな。こんなとこで。
鈴木　はい。
山田　うん、そうや。ほんま、誰が見てるかわからへんのに。
鈴木　ええ。
山田　昼間っから、こんなとこで、初対面の人に、私。
鈴木　知ってますか。ここ、集会所が出来るはずだったんです。
山田　へえ。
鈴木　その前は神社だった。
山田　そうなん。
鈴木　小学生の頃、僕、この近くに住んでたんです。
山田　あれ、私、てっきり、
鈴木　何ですか。
山田　いや、しゃべり方。てっきり私、関東の方から引っ越してきた人やって。
鈴木　こっちに住んでたのは二年だけですよ。
山田　ふうん。
鈴木　親父がね、突然いなくなっちゃって……。それ

から。

山田　うん。

鈴木、少し笑う。

山田　空、高いなあ。

鈴木　はい。

山田　あ、あ。

鈴木　え。

山田　今、めっちゃしょうもない事言いそうになった。

鈴木　何ですか。

山田　いや、ほんま、しょうもない事。ごっつ恥ずかしい事。

鈴木　何ですか。

山田　笑わへん。

鈴木　はい。

山田　あ、でもゆうたら泣いてしまうかもしれん。

鈴木　はい。

山田　冗談やんか。

鈴木　……。

山田　笑うなよ。

鈴木　ええ。

山田　……私は、

鈴木　何ですか。

山田　私はなんで、こんなとこに、いるんやろう。

やや間。山田、笑い出す。

山田　あほらし。なあ。

鈴木　……はあ。

山田　笑うな。

鈴木　はい。

山田　いや、笑ってへんな。うん。

鈴木　僕、ここで失くした物があるんです。

山田　え。

鈴木　ビー玉。ほら、袋に一つだけ大きいやつって入ってたでしょう。小学生の頃、ここで遊んでて、失くしたんです。あんなに大きくて、冷たくて、キラキラ光ってたのに、どうしても見つからなかった。

山田　うん。

鈴木　なんとなく、探しちゃうんです。この頃。失くした事さえ、忘れてたのに。
山田　うん。
鈴木　ちょっと恥ずかしい話してみました。
山田　あんたええ奴やな。

鈴木、笑う。

山田　一緒に探したげよか。ヒマやし。
鈴木　え。
山田　なあんて、メルヘンな事言ってみたりして。
鈴木　さっきの女の人もそう言いました。
山田　え、「こやまさん」。
鈴木　いや、「こやまさん」かどうかはともかく、あの人、一緒に探してくれたんです。ふた月程前、僕がここでただ、ぼうっとしてたんですけど、「何か落としました？」って。僕は「冷たい失くしたビー玉」って、まるで詩のような答え方をして、そしたら、探してくれました。
山田　ええ奴やん。ちょっと変わってるけど。
鈴木　結局、もちろん、当たり前だけど、ビー玉は見つからなくて、去年の暮れだったか、僕は、ほら、B棟の八階に住んでるんです。僕はベランダに出てて、下を見たら、あの人がこっちを見ていました。
山田　うん。
鈴木　それだけです。それだけ。でも、あの時、ベランダの八階からあの人の匂いを感じたんです。もちろん、そんな訳あるはずもないんですが。
山田　香水とちゃうの？
鈴木　たぶん。けど、気味が悪かったんです。いや、気味が悪いとか、そういうのじゃなくてもっとわからない何か。
山田　うん。
鈴木　変ですよね、僕。
山田　そんな事ないと思う。
鈴木　え。
山田　ほら、匂いってさ、本能とかそういうもんに関係ありそうやん。
鈴木　じゃあ、
山田　動物的なカンていうの、そういうやつ、備わっ

てるんかも知れんよ。ええと、あれ？

鈴木　はい。

山田　名前聞いてたっけ？

鈴木　ああ、鈴木です。B棟の。

山田　……。（自分の袖の匂いを嗅ぐ）

鈴木　すいません。先に名乗っておけばよかったですね。

山田　なあ。

鈴木　はい。

山田　私、おんなじ匂いがしたん？

鈴木　え。

山田　香水の下に隠れてる匂いは何？

鈴木　……。

やや間。と、山本が立っている。

山本　娘を見ませんでしたか。

山田　え？

山本　さっき、非常ベル鳴ったでしょう。様子見に行くって出てって、帰って来ないんですわ。

山田　はあ。

山本　さっき、ご一緒でしたな。

鈴木　ええ。

山本　見かけませんか。

鈴木　はい。

山本　そうですか。

山田　あ、じゃあ、私。

山本　はい。

山田　そろそろ、部屋に戻ります。

山本　そうですな。日も陰ってきたし、寒なって……、

山田　どうも。それじゃあ。

と、山田、やや急いだ様子で去る。

山本　部屋着一枚で出て行ったよって、心配なんですわ。

鈴木　ええ。

山本　いや、気持ち、害されたんやったら謝ります。なんも別に疑ってる訳やないよってに。

鈴木　ええ。

山本　しかし、あんな事があったら、女の子としゃべるんも気ぃ使うでしょ。

鈴木　……。
山本　いや、ほんま、お気の毒。
鈴木　あの、
山本　さっき、指差してはったやろ。何かあるんですか。
鈴木　え。
山本　いや、たまたま、目につきましたさかい。（少し笑って）ちょっと私、ブラブラ探してきますわ。
鈴木　奥さんは。
山本　イビキかいて寝てます。娘、何か言いましたか。
鈴木　いえ。
山本　きつい事言うようやけど、娘とはあんまりしゃべらんといてください。いや、これでも親ですよって、いらん心配やってわかってますんやけど。
鈴木　……。
山本　どうも、ほんま、すんませんな。

山本、去りかける。

鈴木　山本さん。
山本　はい、何でしょう。
鈴木　今夜十一時、ここに来てください。娘さんと約束したんです。
山本　はあ。
鈴木　ガメラ、見てみませんか？
山本　はあ。
鈴木　ガメラはね、純真な子供の祈りでやって来るんです。普段は眠ってます。化石みたいに眠ってるんです。
山本　何ゆうてはるんかわかりませんけど、ほななんですか？　アレですか？　子供、先やっつけといたら、ガメラは永遠に来（こ）んと。ああ、それより子供が純真やのうなったらガメラはやって来（こ）んと。せやったら今の時代、ガメラは眠りっぱなしと。なんや高尚な話やけど、何の関係があるんです。
鈴木　……。
山本　最初に子供から殺したんもそういう理由ですか？

鈴木　え？

山本　ははは。鈴木さんの事ゆうてるんと違います。

鈴木　僕は……。

山本　メルヘンなんです。

鈴木　え？

山本　子供が純真なもんやとかね、信じたいだけなんです。信じたい気持ちゆうんはアレでしょ。無いもんを有ると思う訳でしょ。自分に無いから求めるんですわ。手に入れてみたらねぇ、ガメラもただの亀の化けもん。いや、亀の着ぐるみ。中に入っとるんは私みたいなオッサンですわ。

鈴木　娘さんはどうなんです？

山本　……ガメラが来ますか？　娘が呼ぶとガメラが来ますか？　火ぃ吐いて飛んできますか？（笑って）私、走って来ますわ。それが親ってもんでしょう？　空は飛べん、火は吐けん。純真や、そうやないとか、問題やないんです。鈴木さんも子供出来たら気持ちわかると、

鈴木　歯に、毛が付いてますよ。

山本　え。

鈴木　……冗談ですよ。

やや間。山本は指で歯をいじくり続ける。鈴木、きびすを返して去る。小鳥のさえずり。ふっと溶暗。小鳥のさえずりは聞こえない。耳を澄ませば、各部屋の物音が聞こえて来る。

第二幕　一月三日　午後十一時

パンダの面を被った前田と高木。

前田　なあ。

高木　……。

前田　今、どんな顔してるの。

高木　……。

前田　ご機嫌さん？

高木　前田さんは。

前田　ご機嫌さん。（と、お面をいじる）

高木　ふうん。
前田　初詣、楽しなかった？
高木　いや、そんな事ないけど。
前田　小ちゃい神社やったけど、ええ感じやったなあ。
高木　ああ、うん。
前田　まだ怒ってんの。
高木　前田さん、寝てんねんもん。
前田　せやかて、コタツ入ったら気持ち良かってんもん。
高木　全裸で。
前田　まあ、そういう事もある。
高木　俺、走って買いに行ったのに。
前田　それは今晩使おう。
高木　うん。

田中（姉妹）が帰ってくる。
二人もパンダのお面。

前田　あー。
田中（妹）　マネしてる。
前田　え、そっちやん。
田中（妹）　彼氏？
前田　うん。
田中（妹）　親、いつ帰ってくるんやったっけ？
前田　明日の晩。
田中（妹）　やるなあ。
田中（姉）　何。
田中（妹）　ええの、ええの、お姉ちゃんは。
田中（姉）　うん。あの、
前田　はい。
田中（姉）　ここ、入っちゃいけないんですよ。
前田　あ、すいません。はは。怒られちゃった。
田中（姉）　いえ、そうじゃなくてね、ここ、監視カメラで二十四時間見られてるって、知りません。
前田　は？
田中（姉）　ねぇ。
田中（妹）　そうそう。けど見られて困るような事してへんもんなあ。
田中（姉）　そうなの。
田中（妹）　さ、行こ。うち帰ろう。

田中（姉）私、

と、田中（姉）、柵を越えて中に入る。

田中（妹）お姉ちゃん。

田中（姉）なんか、ウキウキしません。

高木　ええと。

と、松田が立っている。彼もパンダのお面。

松田　ありゃ。

前田　あ。

松田　みなさんも神社の方に。

田中（妹）マネし。

松田　いやあ、セイブ・ザ・パンダでしょう。

田中（妹）何それ。

松田　いや、パンダがね、減ってるんですよ。てっきり僕、それで皆さん。

田中（妹）いや、ブームなんかな思って。

松田　パンダがね、子供作らないんです。なんでも話じゃ種としての絶滅が近づいてるんじゃないかって。それで今、パンダブームなんですよ。

田中（妹）知ってた？

前田　私、パンダ好きなだけ。

高木　かわいいよな。

前田　うん。

田中（姉）中国はね、ミサイルか何か作ってるんです。

松田　は？

田中（姉）内緒で作ってるんです。パンダはその口実、隠れみのにしてるんです。パンダが見れないってなったら、皆パンダを見に行くでしょう。見に行ったら、旅行代がかかるでしょう。ホテル代がかかるでしょう。色々食べるでしょう。朝ご飯も昼ご飯も、私は朝ご飯は食べないけど、それには理由がちゃんとあるんだけど、話だしたら長くなるし。だからね、中国にいっぱいお金を落としてくる訳でしょう。

田中（妹）お姉ちゃん。

松田　あ、ビールでも飲みませんか。

田中（妹）え。

松田　D棟の松田って言います。両親は旅行に行ってるもんで、一人なんです。良かったら、ヒマだ

し、皆さんも。ちょうど、ほら、五本あるし。

と、松田、ビールを取り出す。

前田　ありがとう。

他の者も、とりあえず受け取る。

松田　いや、ははは。その、パンダ仲間、て事で、乾杯。

前田　かんぱーい。

松田　ほら、遠慮せんと、どうぞ。

田中(妹)　お姉ちゃん。

田中(姉)　うん。

と、高木を除いて皆飲む。

前田　こういうのってええなあ。ちょっと寒いけど。

高木　あの。

前田　どうしたん。

高木　監視カメラって本当ですか。

松田　は？

高木　ここ、監視カメラで二十四時間、

松田　なんですか、それ。

田中（姉）は奥でガラクタをいじっている。

田中(妹)　すいません。お姉ちゃんの言う事、気にしないでください。

松田　え、何。

高木　なんや、そうか。

田中(妹)　え。

高木　あ、いえ。

田中(妹)　あの、お姉ちゃん、頭おかしい訳じゃないですから。

高木　あ、すいません。

田中(妹)　ちょっと心配性なだけで。

前田　ええやん、別に。カメラ、どこかなあ。

高木　ええと。

前田　私ら、なんか、どう見えるんかなあ。動物園？パンダがいっぱい。

松田　ちょっと、気味悪いんじゃないですか。

前田　なんで。

松田　パンダって、群れで見るもんじゃないでしょ

う。

田中(妹)　お姉ちゃん、それ、動くん？

田中（姉）は、ガラクタの中からカセットデッキを取り出す。出し抜けに中国語の放送。

松田　ははは。

前田　なんか、ねらったみたい。

松田　中国語ってさ、

前田　何。

松田　なんか、いつも怒ってるみたいに聞こえるよな。

前田　そうかなあ。

田中（姉）がラジオのスイッチを切る。

田中(妹)　カセットテープ入ってるよ。

松田　あ、聞いてみましょうよ。

田中(妹)　ええんかなあ。

松田　捨てるくらいだから、大丈夫でしょ。

田中（妹）、スイッチを入れる。雑音。

田中(妹)　あれ？

デッキからは雑音ばかり。

田中(妹)　空(から)かな。

松田　いや、そうじゃないでしょう。なんか、ほら。

前田　秘密テープ？

高木　秘密テープって、なんやねん。

前田　あ、なんか、怒ってる？

高木　怒ってないけど。

前田　他の男の人としゃべったから。

高木　そんなんとちゃう。

前田　あ、早く帰ってしたいとか。

高木　ちょっと、あるかな。

前田　元気やなあ。

と、デッキから、インコの声。

田中(妹)　あっ。

松田　なんだ、これ。

田中(妹)　うん。

やはり、切れ切れにインコの声。

田中(妹) 何か、録音してる？

松田 うん。

と、突然、田中（姉）がうたい出す。

田中(妹) ちょっと、お姉ちゃん。

田中（姉）、歌を止めない。

田中(妹) お姉ちゃんってば。

田中(姉) だって。

田中(妹) どうしたん。

田中(姉) だって、録音されてたら。

田中(妹) え。

田中(姉) 現に、ここにこうしてある訳でしょう。他にも、

田中(妹) ちょっと、違うって。

松田 待って、シーッ。

インコの声に混じって何かのきしむ音。

松田 これ、

田中(妹) 何。

松田 エロテープとちゃう？

前田 わ、恥ずかし。

松田 きっと。

前田 うちのやったらどうしよう。

高木 おいおい。

松田 いや、盗聴とか、そういうのとは違うと思うけど。

田中(姉) ほらほら。

田中(妹) だからお姉ちゃん、違うって。

田中(姉) そうなの。

田中(妹) うん。

全員、耳を澄ます。聞こえて来るのは、やはり、インコの鳴き声と、何かのきしむ音。

松田 あの、おでんか何か、買ってきませんか。

田中(妹) え。

松田 そこのコンビニって、十二時で閉店だっけ？

田中(妹) 今、何時。

松田　十一時、ちょっとまわったところ。
前田　私ら、買ってきましょうか？
高木　おい。
田中（妹）　ここで酒盛り？
前田　あそこ、お酒も置いてましたよね。
高木　ちょっと、
松田　いいじゃないですか。お正月ですし。
前田　パンダ会。
高木　って、なんやねん、それ。
前田　行ってきます。
高木　おい。

と、前田、行ってしまう。
高木、追いかけて行く。

松田　最近、あったかいですよね。
田中（妹）　異常気象？
田中（姉）　去年、衛星打ち上げたでしょう。コントロールしてるんです。だって、冬があったかくなったら、資源の無駄遣いが減るでしょう。
松田　へえ。

田中（姉）、ガラクタの方へ。

田中（妹）　慣れてきた？
松田　要はあわせればいいんでしょ。
田中（妹）　うん。でもね、お姉ちゃんの言ってる事、ウソと違うよ。
松田　え？

小さく、「ねぇ」という声。

田中（妹）　あれ、今の、
松田　え、何。
田中（妹）　ほら、今。

きしむ音は聞こえない。
インコの鳴く声。

田中（妹）　あれ、……ちょっとお姉ちゃん、何してるの。
田中（姉）　だって。

田中（姉）は山田の捨てたゴミ袋を引っ張り出している。

田中（妹）それ、誰かゴミ捨てたんやって。
田中（姉）だって。
田中（妹）ほら、年末の回収日、きっと忘れてたんよ。
松田　俺も危うく忘れるところやって、
田中（姉）だって、ほら。

田中（姉）が引き裂くと、大量のカセットテープ。

田中（姉）ほら、これ。
松田　おいおい、ちょっと。
田中（姉）良かった。
田中（妹）うんうん。
田中（姉）テープだけ。テープばっかり。
田中（妹）うん。
田中（姉）良かった。良かった。良かったね。
松田　あ、僕、親から電話かかってくるんでした。うん。ちょっと戻ります。
田中（姉）はい。
松田　すいません。二人戻ってきたら、ええと、
田中（妹）急用？
松田（笑って）そうしてください。

松田、退場。

田中（妹）お姉ちゃん。
田中（姉）うん。
田中（妹）ごめんな。
田中（姉）うん。
田中（妹）お姉ちゃん、私が他の男の人としゃべるんが嫌なんやろ。だから、怒って、でも、どうしたらいいんかわからへんから、色々するんやろ。うたったり、中国の話したり。
田中（姉）ねえ。
田中（妹）何。
田中（姉）お姉さん。（自分を指して）
田中（妹）うん、そう。
田中（姉）松田さんやったっけ。
田中（妹）うん。
田中（姉）あほ。
田中（妹）うん。
田中（姉）全然顔違うのに。

田中（妹）しっ。
田中（姉）え。
田中（妹）まだあるかも知れへんよ。カセットデッキ。

田中（姉）、少し笑う。

田中（妹）帰ろう。
田中（姉）うん。

二人、退場。テープは回ったまま。
インコの鳴き声。
テープから聞こえるのは佐藤（妻）の声。

佐藤（妻・声）小山さんの事やけどな。
（ＳＥ）インコの鳴き声。
佐藤（妻・声）工事始めるってウワサ、本当？
（ＳＥ）笑い声、複数。
佐藤（妻・声）ほな、はよ済まさんと。
（ＳＥ）何かの割れる音。静寂。
佐藤（妻・声）山本さんとこ？
（ＳＥ）笑い声、複数。静寂。
佐藤（妻・声）あれ。
（ＳＥ）静寂。インコの鳴き声。
佐藤（妻・声）いつもやったらここで奥さんの、
（ＳＥ）インコの鳴き声。
佐藤（妻・声）想像してみて。
（ＳＥ）インコの鳴き声。
佐藤（妻・声）簡単やろ。
（ＳＥ）テープのガチャっという音。
佐藤（妻・声）（大きめに）聞いてる？　ねぇ。
（ＳＥ）テープのガチャッという音。音楽。

と、鈴木が一人、立っている。

鈴木　やっぱり、来る訳ないよな。
佐藤（妻）こんばんわ。

佐藤（妻）、パンダのお面を被って立っている。

鈴木　あ。
佐藤（妻）鈴木さんは神社の方行かはらへんの。
鈴木　あ、はい。
佐藤（妻）かわいいでしょ、これ。
鈴木　はあ。

佐藤(妻)　どうしたの。私の顔、何かついてる？
鈴木　それ。
佐藤(妻)　このお面。鈴木さんて、冗談も言わはるんやねぇ。
鈴木　僕の名前、知ってるんですか。
佐藤(妻)　一時、有名やったでしょう。
鈴木　怖くありませんか。
佐藤(妻)　え、なんで。
鈴木　僕、人殺しですよ。もう三人殺してます。それもこの団地の人ばかり。
佐藤(妻)　そうなの？
鈴木　全部、女の人です。
佐藤(妻)　秋口の頃やったっけ？
鈴木　一番始めは夏です。お盆を過ぎたあたり。確か、
佐藤(妻)　自分で殺したのに、いつか覚えてへんの。
鈴木　夏だったし、蒸し暑くて。僕は、仕事もしてないし、曜日の感覚もなくて。
佐藤(妻)　私も。
鈴木　え。
佐藤(妻)　うち、子供いないでしょう。毎朝、ご飯作って、テレビ見て、てしてたら、曜日の感覚はわかるけど、今日が何日かとか、関係ないでしょう。
鈴木　はい。
佐藤(妻)　ダンナとね、セックスするでしょう、時々。それは覚えてるの。うまくいくのって珍しからね。(笑って)で、その前後の記憶をたどるとね、ああ、そういや、あの時はこんな事してたなあて思い出すんよ。
鈴木　ダンナさん、いらっしゃるんですか。
佐藤(妻)　(それには答えず)一人目の人がね、殺された日も。だから覚えてるんです。ちょうど次の日だったから。朝ご飯、ちゃんと作ったし、お弁当もね、持たせたんです。なんだか目覚めが良くってね。
鈴木　……。
佐藤(妻)　ウィンナーはタコの形に切ってね、桜でんぶでハートマーク作って、うずら卵ときゅうりをこう串に刺してね。新婚さんみたいでしょ

う。

鈴木　結婚されて長いんですか。

佐藤（妻）　それから三日ぐらいお弁当持たせたんですよ。夏だから傷みが早いでしょう。だから毎日早起きして、海苔でほら、パンダも作ったのよ。

鈴木　パンダ。

佐藤（妻）　そう。八月十九日。覚えてるんです。二人目は八月二十六日。最初の二人はすぐ発見されたのよね。

鈴木　……。

佐藤（妻）　三人目が発見されたのは九月一日。でも死んだのは、確か、八月の始めぐらいなんでしょう。

鈴木　やっぱり、その。

佐藤（妻）　ええ。

鈴木　お弁当、作ったんですか？

佐藤（妻）　もう、鈴木さんたら。

音楽はもう聞こえない。ただ、テープは回っている。

佐藤（妻）　夏からなんです。うち、この春引っ越して来たでしょう。ダンナもほんの少し出世して、気苦労もあったみたいやし。気苦労言うてもねぇ、小さい会社やのに、ほんまに。

鈴木　……。

佐藤（妻）　ほら枕が変わると眠れないって言うでしょう。うちのダンナ、それがココに来ちゃったみたいで。あ、ごめんなさい。

鈴木　いや。

佐藤（妻）　でもそれも九月まで。ほら、鈴木さんのお宅、刑事さんがやって来たんがそれくらい？

鈴木　はい、たぶん。

佐藤（妻）　バタバタしてたでしょう。ダンナ、小心者で神経質やからね、また、元気なくなっちゃって。

鈴木　すいません。

佐藤（妻）　あ、ごめんなさい。鈴木さんのせいとちゃうんですよ。あくまでうちのダンナの問題。あの人、盗聴でもされてたらどうする？　なんて言って。まさかねえ、そんな事あるわけないのに。

と、デッキより、インコのさえずり。

佐藤（妻）あら。

鈴木　え。

佐藤（妻）何これ。

鈴木　いや、さっきから。

佐藤（妻）そうなの？

佐藤（声）助けて。

佐藤（妻）やだ。盗聴テープ？

佐藤（声）真っ赤だ、真っ赤。

（ＳＥ）インコのさえずり。

佐藤（妻）この散らばってるのもそう？

鈴木　いや、僕は今来たところだから。

佐藤（妻・声）寝言？（女の笑い声）

（ＳＥ）インコのさえずり。

佐藤（妻）、デッキのスイッチを切り、テープを入れ替える。

佐藤（妻）こっちも聞いてみる？

鈴木　今の、

佐藤（妻）山田さんやったっけ？

佐藤（妻）、スイッチを入れる。テープの回る小さな音。

佐藤（妻）、ボリュームを上げてみる。

佐藤（妻）あら？

だしぬけに一昔前のポップス。

佐藤（妻）あ、

佐藤（妻）、スイッチを切る。

佐藤（妻）なんだ、つまんない。

と、前田と高木がやってくる。

前田　あれ？

佐藤（妻）あら、おそろい。

前田　松田さんは？

高木　なんで松田が出て来るねん。

前田　は？

高木　他にもおったやろ。

前田　田中さん。
高木　そう。
前田　まだ、すねてんの。
佐藤（妻）　どうされました？
前田　いや、さっきここでね、なあ。
高木　いや、松田さんって人が酒盛りせえへんかって。
前田　パンダ会。
高木　はいはい。
佐藤（妻）　私が来た時には、

と、佐藤（妻）、鈴木を見る。

鈴木　あ、誰もいませんでしたけど。
高木　ほら。
前田　何。
高木　いや、そういうもんやって。ええ加減やねん。松田ってやつも、あの姉妹も。
前田　なんでそんなこと言うんかなあ。
高木　だって別に友達でもないんやろ。おかしいわ。
鈴木　あ、あの、
高木　ああ、あの妹さんとは知り合いみたいやったけど。
前田　同じ階やねん。
高木　ほら。その程度やろ。
前田　あの二人、姉妹とちゃうよ。
高木　え？
鈴木　あの、これ、
前田　あ、これ、何か入ってました？
鈴木　これ、前からあったんですか？
前田　やんなあ。
高木　はい。
前田　うわ、これ何、いっぱい。
高木　もうええやんか。
前田　何怒ってんのかなあ。
高木　いや、怒ってへん。怒ってへんけど。
前田　さては、さかってるなあ。（鈴木に）なあ、これも一緒のやつ？
鈴木　あ、いや、これは、

前田、テープを入れ替えてスイッチを押す。
赤ん坊の泣き声。

鈴木　え。
前田　これ、日付ふってある。
高木　何。
前田　やっぱし、これも？
松田（声）　あれ、佐藤さんのダンナさんちゃうか？
前田　あれ？　これ、
高木　何。
前田　これ、さっきの、松田さんとちゃう？
高木　まさか。
松田（声）　ゴミ出してはる。
前田　八月十九日。
松田（声）　ああはなりたないなあ。
藤原（妻・声）　そうゆうもんやろ、普通。
前田　これは？

と、前田、別のテープに入れ替える。何かのきしむ音。

前田　これ、高木君、遊びに来た日のやつ。
高木　ちょっと。
前田　良かった。うちとちゃう。
高木　え。
前田　高木君、声大きいし。
高木　あほぉ。

前田、テープを切る。別のテープを取り、

前田　あ、おとついのやつ。（と、デッキに入れる）

上田が通りかかる。

鈴木　あ。

上田、じっと四人を見つめる。

鈴木　あの。
上田　娘の手、まだ見つからないんです。
鈴木　はい。

上田、足早に去る。

前田　帰ろっか。
高木　う、うん。
佐藤（妻）　少し冷えてきましたねぇ。
前田　はい。じゃあ、どうも。

高木　今の誰？
前田　上田さん。ほら、八月のあれ、娘さん亡くなってん。
高木　あれって犯人捕まったんやっけ？
前田　ちゃうかったみたい。

二人、去る。

佐藤（妻）　忘れ物。
鈴木　あ。
佐藤（妻）　りんごあめ。懐かし。
鈴木　ええ。
佐藤（妻）　これって、舌、真っ赤っ赤になるでしょう。
（食べ始める）
鈴木　ちょっと、
佐藤（妻）　何？
鈴木　いえ。
佐藤（妻）　ねぇ、あれ、見つかったん？
鈴木　え、何ですか。
佐藤（妻）　（少し笑って）冷めたい失くしたビー玉。
鈴木　ははは。
佐藤（妻）　よく覚えてるでしょう。
鈴木　ええ。
佐藤（妻）　十月の終わり頃やったっけ。
鈴木　はい。
佐藤（妻）　何日か、覚えてる？
鈴木　え。
佐藤（妻）　十月二十九日。
鈴木　お弁当、作ったんですか。
佐藤（妻）　ええ、久しぶりにね。
鈴木　ふた月ぶり。
佐藤（妻）　なんでわかるの、嫌やわぁ。
鈴木　だって、
佐藤（妻）　九月一日から？　ちょうど二月ぶり。
鈴木　……。
佐藤（妻）　鈴木さんは若いし、わからへんかも知れへんけど、夫婦なんてそんなもんなんよ。突然できなくなっちゃうし、ちょっとしたらそれが普通になるの。そうなるとね、なかなか、次の機会なんて来ぇへんのよ。
鈴木　どうしたら、

佐藤（妻）何。

鈴木　どうすれば次の機会って来るんですか？

佐藤（妻）心境の変化？

鈴木　どういう？

佐藤（妻）嫌やわ、鈴木さん、刑事みたい。

鈴木　いや、すいません。

佐藤（妻）（笑って）そうやねぇ。何かに飽きたとか、それとも、諦めたとか。男の人ってそういうもんとちゃうの。

鈴木　僕には、その、

佐藤（妻）ほら、職場の若い女の子に熱上げてたんやけど、駄目やったとか、それとも、まあ、うちのダンナに限ってそれは無いと思うけど、不倫相手に飽きが来たとか。男の人にはね、「帰巣本能」っていうのがあるんやって。知ってる。

鈴木　いえ。

佐藤（妻）浮気したいんとかは、「播種本能」っていうねんけどね。種の本能って話で言えば、女が子供かわいがるんと同じ類いの本能なんよ。利己的遺伝子っていうの。要はどっちも自分の遺伝子が大事。

鈴木　じゃあ、女の人にはその、えーと、

佐藤（妻）どうやろ。女はタネ貰う方やからね。男の人とは方向が違うけど、それはあると思うよ。出来るだけええオスのタネ貰おうとか。なんや身も蓋もないけどね。鈴木さんは女の人好き？

鈴木　え、ええ。

佐藤（妻）私も、男の人、好きよ。

鈴木　はあ。

佐藤（妻）あ、誘ってるわけちゃうからね。

鈴木　いや、はは。

佐藤（妻）なんて言うんかなあ、昆虫とかやとメスの方が強いでしょう。播種本能の反対？

鈴木　昔、カマキリを飼ってて、

佐藤（妻）ありがちな話？

鈴木　いや、ある日、虫カゴの近くにもう一匹いたんです。たぶん、オスだった。

佐藤（妻）うん。

鈴木　オスは僕がそばに寄っても逃げなくて、まるで、虫カゴの扉を開けてくれるのを待ってるみ

たいに。

佐藤（妻）、少し笑う。

鈴木　僕は望みをかなえてやりました。もう小学校の高学年だったから、結果がどうなるかも知ってて。

佐藤（妻）　それで。

鈴木　あっという間に食べられちゃいました。オスは、体の三分の一を食べられても、交尾してました。僕はずっと見てました。同類はあんまりおいしくないみたいで、足と羽が残りました。蝶や蛾なら残さず食べるんです。僕はその頃、人食い人種の話を本で読んでて、同類を食べるっていうのはきっと味がどうこうって問題じゃなくて、きっと別の何かがあるんだろうって、それを見ながら考えました。ただどうせ食べるんなら、全部食べてやればいいのにって、悲しくなったのを覚えています。

やや間。鈴木、少し笑う。

鈴木　この話、警察でしゃべってたら危なかったですよね。

佐藤（妻）　そう？

鈴木　もし、僕が犯人だとして、捕まって精神鑑定を受けて、これって、

佐藤（妻）　鈴木さんは本当に自分が犯人だって思ってるの？

鈴木　よくわかりません。

佐藤（妻）　実はね、

鈴木　はい。

佐藤（妻）　知ってる？　他にもいなくなってる人が多いって話。

鈴木　え。

佐藤（妻）　夏の事件でうやむやになってるけど、最近見かけないって人、多いらしいの。

鈴木　……。

佐藤（妻）　私の周りでもね、隣の奥さん。いつもダンナさんとケンカしてるんやけどね、ここ二、三日声が聞こえへんのよ。

鈴木　はあ。

佐藤（妻）（笑って）お正月やしね、お正月くらいはケ

ンカせぇへんのかも知れへんけど。

鈴木　はい。

佐藤（妻）　山本さんっていうねんけどね。

鈴木　え。

佐藤（妻）　知ってる？

鈴木　いえ。

佐藤（妻）　ほんま、物騒やねぇ。

やや間。チチッとインコのさえずり。

佐藤（妻）（笑って）寝ぼけてるんかしらね。

鈴木　一つ聞いてもいいですか。

佐藤（妻）　ええ何。

鈴木　十月二十九日以降は、

佐藤（妻）　え？

鈴木　お弁当作りましたか。

佐藤（妻）　もう、嫌やわぁ。

鈴木　帰巣本能が勝ったのか聞きたくて、ほら、後学の為に。

佐藤（妻）　それって私浮気されてるってこと？

鈴木　いや、そういうんじゃないですけど、気になって。

佐藤（妻）　本当はもっと他に聞きたいことがあるんやないの？

鈴木　いえ……。

佐藤（妻）　お弁当、作ったわよ。ちょっと頻繁やとね、献立に困るんやけど、うちのダンナ、何でも残さず食べてくれるからね、結構ラクチン。主婦の献立なんてね、けっこう適当なんよ。鈴木さんもお嫁さんもろたら気ぃつけんとね。胃腸は丈夫？

鈴木　あんまり。

佐藤（妻）（笑って）じゃあ、子供なんかできた時は、外食にせんと。ダンナのお弁当なんて約束事やからね。奥さんが機嫌のええ時は別やけど、そうじゃない時は約束事やからね。おいしいもん食べてもらおうとか、そういう味の問題やなくなるからね。

鈴木　じゃあ、

佐藤（妻）　なんて言うんかなぁ。お弁当って食べたら箱が残るでしょう。持って帰っておいでって言

うてるみたいに。

鈴木　……。

佐藤（妻）　鞄にお弁当箱持って浮気する人って少ないって思うの。どうしても主張するでしょう。かさばるし、匂うし。ほら、何かの拍子に鞄開けて、あ、これ昨日の煮物の匂いやな、とか思たら萎えると思わへん。

鈴木　ええ。

佐藤（妻）　（笑って）まあ、私は、目覚めのいい時しか作らへんからね。けどその方がさっぱりしてるでしょう。

鈴木　さっぱり、ですか。

佐藤（妻）　最近は作ってへんのよ。

鈴木　なぜ？

佐藤（妻）　飽きたんかな。

鈴木　何に？

佐藤（妻）　（答えず）ダンナも私も。

鈴木　……。

佐藤（妻）　それはそれでね、さっぱりしてるの。きっと。

鈴木　きっと？

佐藤（妻）　そんなもんかなって。けど今、愛が無いわけとちゃうのよ。むしろ……、

鈴木　何ですか？

佐藤（妻）　やっぱり、うん、優しい気持ち？

鈴木　優しい気持ちって、誰に？

佐藤（妻）　鈴木さんはまだもやもやしてる？

鈴木　ええ。

佐藤（妻）　どんな？

鈴木　なんとなく、しっかりつながらないって言うか。

佐藤（妻）　事件のこと？

鈴木　ええ。時々自分は犯人なんじゃないかって。もし犯人だったらどうして殺したんだろうって、色々考えてみるんですけど、つながらない。

佐藤（妻）　いっぺんやってみたら？

鈴木　え？

佐藤（妻）　冗談。真顔で聞かないの。

鈴木　僕は死んだ三人のこと、ほとんど知らないんです。これは警察でも言われてた事ですけど、僕達には、接点が無いんです。いわゆる痴情のもつれとか、金銭がらみとか。

佐藤（妻）　ええ。

鈴木　死んだ三人は年齢もマチマチだし、容姿にとり立てて共通点がある訳じゃない。つまり、その理由が見つからないんです。

佐藤（妻）　あら。

鈴木　え。

佐藤（妻）　一つあるやない。

鈴木　女の人って事だけでしょう。けど、女であるって事だけで、決め手になる接点が無い。髪が長いとか、太ってるとか、眼鏡をかけてるとか、そういった、嗜好性ってものが皆無なんだ……って、刑事さんに言われました。じゃあだから動機は何なんだって。もし、僕が犯人だとしても、殺そうってするそのキッカケが僕にはわからないんです。

佐藤（妻）　この団地の住人。死んだ人みんな。

やや間。

佐藤（妻）　もし、別に犯人がおるとして、

鈴木　はい。

佐藤（妻）　鈴木さんはそれが誰やと思う。

鈴木　……。

佐藤（妻）　人殺した後って、やりたくなるって言うよね。

鈴木　え？

佐藤（妻）　でも厳密に言うと違うんよ。セックスと殺人って、同じもんやと思うの。

鈴木　じゃあ、

佐藤（妻）　両方する人ってきっとヘタクソなんよ。どっちも。

鈴木　……。

佐藤（妻）　うちのダンナやと思てる？　ピッタリかも知れんけど。（間）うちのダンナやとしたら、

鈴木　はい。

佐藤（妻）　お弁当の計算が合わへんやない。

鈴木　ダンナさんは何か、その、この団地に恨みでも持ってるんでしょうか。

佐藤（妻）　（笑って）そんなんやない。それは違うと思う。

鈴木　じゃあ、どうして、この団地の住人ばかり。

佐藤（妻）　身近にいたからと違うかな。

鈴木　え。

佐藤（妻）　他に理由、考えられる？

鈴木　……。

佐藤（妻）　せやったら、私も危ないって事よね。

鈴木　え、ええ。

佐藤（妻）　一番身近にいるわけやし。

鈴木　はい。

佐藤（妻）　ってなんか、うちのダンナが犯人って事になってる？

鈴木　あ、いえ、その。

佐藤（妻）　鈴木さんも気ぃつけた方がいいわよ。

鈴木　あ。

佐藤（妻）　私、佐藤っていいます。名前、知らなかったでしょ。

鈴木　佐藤さん。

佐藤（妻）　さっき、山田さんのテープに名前出てきてたでしょう。あれ、うちのダンナ。

鈴木　はい。

佐藤（妻）　これ、どうする？（散らばったテープを指して）

鈴木　え。

佐藤（妻）　ここに放（ほ）ってたら、誰か聞くでしょう。山田さんには悪いけど、藤原さん大変でしょ。これ聞かれたら。

鈴木　はい。

佐藤（妻）　けど量が量やしね。どうせやったら最後のやつ聞いてみる？　何かわかるかもよ。

鈴木　何が。

佐藤（妻）　さあ。でも聞いて欲しいから持って来たわけでしょう。

鈴木　……。

佐藤（妻）　そろそろ戻るね。

鈴木　このカセットデッキは、誰が、やっぱり、山田さんが。

佐藤（妻）　うちのダンナやったりして。

佐藤（妻）、行きかけて田中（姉妹）とすれ違う。

佐藤（妻）　こんばんわ。

田中（妹）　こんばんわ。

佐藤（妻）、行ってしまった。

田中（妹）それ、聞かないんですか？

鈴木　え。

田中（妹）私らが見つけたんです。そのテープ。お姉ちゃんがどうしても気になるって。

田中（姉）きっと聞いて欲しいんやと思うの。

鈴木　え？

田中（姉）聞いて欲しいからここにいるんでしょ、その人。

鈴木　その人？

田中（姉）ここ、人目が多いでしょ。みんな見てるでしょ。黙ってるでしょ。

鈴木、テープのスイッチをいれる。

田中（姉）私達はじっと息詰めて汗をかくの。暑い。冬やのに、暑い。

田中（妹）、田中（姉）にキスをする。

テープから山田の声。

山田（声）一月一日、晴れ。元旦の日はいつもいいお天気だ。年の始めが天気がいいとやっぱり嬉しい。静かだ。今、午前七時十六分。空気はひんやりして、小鳥達はまだ眠っている。車の音も、人の声も聞こえない。紅白歌合戦は途中でやめてしまった。ゆく年くる年を見なかったのも久しぶり。昨日のお寿司が半分干からびてテーブルの上にある。藤原さんが買って来てくれたものだけど、結局ほとんど食べずじまいだ。そういえば年越しソバも食べてない。おなかがすいた。立ち上がろうとしたら、足が床にはりついてた。ペリペリッて音がする。掃除しなくちゃって思うんだけど、もう少しこのままでいようと思う。昨日作ったお味噌汁を飲んだ。手作りだから冷めてもおいしいって、藤原さんが褒めてくれたやつ。あんまり、おいしくない。私の横で藤原さんが寝てる。起こしたら、やっぱりペリペリッて音がした。不思議と寂しさはない。静かなお正月の朝だ。藤原さんは動かない。

佐藤が立っている。

テープが止まった。

佐藤　やあ、鈴木さん。龍馬が死んじゃったんですよ。寂しくってね。

遠くでパトカーのサイレン、近づいてくる。

溶暗。

第三幕　一月四日　午前六時

夜明け前。

溶明すると、鈴木、山本（娘）、二人。白み始めた「こやまさんちのにわ」に二人座っている。

山本（娘）　昨日は来（き）やんでごめんな。

鈴木　ああ、うん。

山本（娘）　お父さんが出してくれへんかってん。

鈴木　うん。

山本（娘）　疲れてる。寝てへんのとちゃう？

鈴木　そんな風に見える？

山本（娘）　目の下、クマできてるで。

鈴木　そうかな。

山本（娘）　うん。

鈴木　じゃあ、それっぽく見えるかな。

山本（娘）　何。

鈴木　連続殺人犯。

山本（娘）　やっぱり、そうなん。

鈴木　うん。きっと。

山本（娘）　マジで。ほんまに。

鈴木　自首してこなくちゃ。

山本（娘）　ちょっと。

鈴木　でも、

山本（娘）　ええやん、黙っといたら。

鈴木　そうかな。

山本（娘）　良心のかしゃくとか、感じるの？

鈴木　うん。

山本（娘）　やってもないのに。

鈴木　うん、そうだ。
山本(娘)　(笑って)もう。
鈴木　今なら間に合うかもしれない。
山本(娘)　何が。
鈴木　山田さんとこ、まだ刑事さん残ってるだろ。
山本(娘)　もしかして、
鈴木　何。
山本(娘)　鈴木さん、犯人、知ってるんちがう。
鈴木　きっと、うん。
山本(娘)　知り合い？　かばってるとか。女の人？
　今どき流行らんでそういうの。
鈴木　違う。
山本(娘)　じゃあ、何。
鈴木　よくわからないけど、僕には動機がある。
山本(娘)　動機？
鈴木　あそこに山田さんのテープがあるんだ。聞いて
　みればわかる。警察には教えなかったけど。
山本(娘)　なんて。
鈴木　彼女は藤原さんが好きだった。でも藤原さんに
　は奥さんがいて、その奥さんは別の男と浮気し
　て、彼女はそれを知ってて。つまり、カップ
　ルが新しく二つ出来て、うまくいくことも出来
　たはずだけど、どこかで狂っちゃった。なぜそ
　うなったかはわからない。わかりたくもないけ
　ど。
山本(娘)　何。
鈴木　たぶん、それはまだ人間らしい。
山本(娘)　それって、痴情のもつれってこと。
鈴木　安心するだろ。動機は痴情のもつれですって一
　言で片付く。でもその内は複雑でからまりあっ
　て、それでも、きっと、その方がまだ人間ら
　しい。こわいのは、簡単すぎるって事だ。
山本(娘)　鈴木さんは人間らしい納得のいく動機があ
　るん？
鈴木　僕は今、君を殺そうって思った。
山本(娘)　こわ。
鈴木　首筋にキスマークがついてる。
山本(娘)　え。
鈴木　昨日の晩、何があったかなんて、僕は知りたく
　もない。ただ、わかるのは、僕は君の首筋のキ

スマークに欲情してるって事だ。それもただ抱きたいとかじゃなくて、もっと暗い、ドロドロした欲望だ。それを一言で片付けるなら、「君を殺したい」って気持ちだ。

山本(娘)　三人殺したんも、そういう理由？

鈴木　ああ。

山本(娘)　動機は何。なんて言うの。性的モウソウとか。

鈴木　うん、それ。

山本(娘)　十歳から四十歳まで。守備ハンイ広いなぁ。

鈴木　そう。

山本(娘)　あほみたい。納得いかんわ。

鈴木　じゃあ、今、君を殺してみようか。

山本(娘)　どうやって。

鈴木　首を……、

山本(娘)　切るの、絞めるの？　私、他の人は別にして、私だけの理由やったら、ちょっと納得できる。

鈴木　僕は、

山本(娘)　痛いのはいややけど、死ぬんはあんましこわない。

鈴木　なぜ。

山本(娘)　殺すんも同じやと思う。殺すんはこわいけど、殺してしもたら、なんにもこわない。アリやゴキブリ殺すんと一緒。鈴木さん、虫、殺した事あるやろ。

鈴木　カマキリを飼ってて……。

鈴木、山本（娘）を抱きしめる。

山本(娘)　うん。

鈴木　カマキリを飼ってた、子供の頃。昔、ここが神社だった時、つかまえたやつ。メスだった。毎日虫とりにいって、チョウやバッタを食べさせた。いつだったか、カエルをやったこともある。カマキリにつかまった小さなカエルは、苦しそうにゲッゲッて鳴いた。赤い血が流れた。

インコのさえずり。

鈴木　秋になって、オスが一匹、たずねてきたんだ。僕が近づいても逃げなくて、虫カゴに入れてやったんだ。あっという間に食べられちゃった。オスはそれでも交尾を続けて、しばらくし

て、メスは卵を産んだ。

山本（娘）痛い。

鈴木、山本（娘）から離れる。やや間。

山本（娘）なあ。

鈴木　何。

山本（娘）それってな、メスが呼んでるん。それともオスが探してるん？

鈴木　え。

山本（娘）いや、どうやってみつけたんかな思て。

鈴木　昆虫のメスにはフェロモンってものがあるから、たぶん、メスが呼びよせたんじゃないかな。

山本（娘）人間は？

鈴木　人間が、何。

山本（娘）セックスしたいっていうんは、一体、どっちが信号出してるんやろう。

鈴木　あっ。

山本（娘）何。

鈴木　いや。

山本（娘）うちの話、聞いてへんやろ。

鈴木　いや、いや。

山本（娘）鈴木さんはエッチしたことある。

鈴木　そりゃ、まあ。

山本（娘）もっとあいさつみたいにできたらええのになあ。おかえり、ただいま、みたいに。

鈴木、少し笑う。

山本（娘）私は、

鈴木　何。

山本（娘）おかえりなさい、ただいま、みたい。

やや間。突然、鈴木が頬を押さえる。

山本（娘）どしたん？

鈴木　今、何か、当たった。

山本（娘）え。（と、上を見上げる）

上田が立っている。

上田　そこ、踏まんといてください。

鈴木　え。

上田　お墓があるんです。

鈴木　お墓？

鈴木、再び頭を押さえる。

山本（娘）　お父さん。

山本（娘）、走って出て行く。

上田　マリオのね、お墓。

鈴木　マリオ？

上田　そう。

上田は小さなジョウロで水をやる。

上田　うちの娘が大事にしてたサルです。

鈴木　サル。

上田　そう、サル。毛が抜けてね、かきむしるもんやから、ただれちゃって、ノイローゼって言うんかしら。あんなにかわいがってたのに。

鈴木　……。

上田　ここに埋めました。気持ち悪いしね。娘には内緒で。だってかわいそうでしょう、娘が。泣くんです。嫌がるんです、娘が。お医者さんは変な病気やないって言うてくれるんですけど。

鈴木　それで。

上田　お医者さんにあげましたって、娘には。お医者さんは偉いねぇって。お医者さんもカイカイの人やから、よう気持ちがわかるんよって。

鈴木　埋めたんですか。

上田　ええ。

鈴木は吐き気が込み上げてきた。

上田　主人はちゃんと供養した方がいいって言うんですけどね。

上田は、水を撒いた所にバナナを供える。

上田　ちゃんと、やってるやない。

上田は、ジョウロをたたきつける。

上田　ちゃんと、やってるでしょ、私。

鈴木は再び頭を押さえる。

上田　鈴木さん。

鈴木　はい。
上田　頭、痒いんですか。
鈴木　え。
上田　バナナ、食べます？

やや間。赤ん坊の泣き声。藤原、赤ん坊を抱いて登場。

上田　藤原さん。
藤原　あ、あけましておめでとうございます。
上田　あけましておめでとうございます。
藤原　本年もどうぞよろしくお願いします。
上田　こちらこそ、どうぞよろしくお願いします。
藤原　……あ、ごめんなさい。私。
上田　いえいえ、気ぃ使わんといてください。
藤原　本当に、去年は。
上田　もう済んだことですから。
鈴木　藤原さん？
藤原　はい？　えっと、何かあったんですか。
鈴木　あの、
上田　私、おぼっちゃん、連れて上がりましょか。ちょうど戻るとこですし。
藤原　え。
上田　さあ、おばちゃんと一緒に行きましょねぇ。
藤原　どうも、すみません。

上田、赤ん坊を抱いて去る。

藤原　（少し見送って）タバコ、持ってへん。
鈴木　え、あ、はい。

鈴木、藤原にタバコを渡す。

藤原　（一息ついて）道混んでてさあ、大変やったんやから。
鈴木　帰省されてたんですか。
藤原　ダンナがさあ、出張やゆうんよ。正月に出張って、普通ないよなあ。ミエミエやんか、ほんま。
鈴木　……。
藤原　さっきのおばはん、おかしいやろ？
鈴木　え。
藤原　子供殺されておかしなったんとちゃうで。もと

からおかしいねん。夫婦そろって変な宗教入っとってなあ、去年集会で何言うた思う？

鈴木　去年。

藤原　春先、もちろん、子供死ぬ前。ここにシェルター作りましょうって、真顔で言うねんで。あほちゃう。

鈴木　シェルターですか。

藤原　あの夫婦の頭ん中は計り知れんわ。サル飼うてた話、聞いた？

鈴木　はい。

藤原　ふた月もたへんかってんから、かわいそうや思わん？

鈴木　ええ。

藤原　君、鈴木さんやろ。

鈴木　あ、はい。

藤原　ここの住人って、おかしいやつばっかし。なあ。

鈴木　そうですか。

藤原　君から見たらみんな普通？

鈴木　え。

藤原　冗談、冗談。真顔で聞かんといてぇな。

鈴木　ええ。（と、少し笑う）

藤原　誰が犯人やてわかっても私は驚かへんけどな。君はどう思う。

鈴木　ええと。

藤原　私かて、時々、子供ベランダから放りたなるもん。

鈴木　……。

藤原　あ、うそうそ。そういう事言うてみたなる時ってあるやろ。そういうやつ、今の。

鈴木　僕にだって、ありますよ。

藤原　え？

鈴木　突然……。そんな時って、でも、

藤原　でも何。

鈴木　それが普通なんじゃないかなって思うんです。

藤原　さすが、人間バラバラにした人は言うこと違う。うん。

鈴木、少し笑う。

藤原　つっこんでぇな。冗談やねんから。

鈴木　藤原さん。
藤原　何。
鈴木　ご主人、亡くなりました。
藤原　また、何言い出すんか思たら、
鈴木　山田さんって、知ってます。
藤原　……。
鈴木　今、警察が来て現場検証してます。山田さんって人にご主人、殺されたんです。
藤原　いつ。
鈴木　たぶん、大晦日の日に。
藤原　ふうん。

藤原、鈴木のポケットからタバコを取る。一服する。

鈴木　僕じゃありません。
藤原　そやね。

インコのさえずり。

藤原　猫埋まってるんよ、そこ。
鈴木　はあ。
藤原　小山さん家（ち）の猫、死んでね。ここに埋めたんやって。だから「こやまさんちのにわ」って。
鈴木　……。
藤原　A棟の九階に住んではったんやけどね。
鈴木　住んでた？
藤原　うん。七月の末から姿見いへんなあ、ゆうてね。
鈴木　どうして死んじゃったんですか、その猫。
藤原　さあ。三匹もおったんやけど。
鈴木　……。
藤原　うちの人、猫大嫌いでさあ。
鈴木　……藤原さん。
藤原　ああ、うん。

藤原、タバコをもみ消す。

藤原　ありがとう。
鈴木　いえ。
藤原　なあ、私、どんな顔してる？
鈴木　え。
藤原　顔、笑（わろ）てへん？

鈴木　今。
藤原　ああ、そうか。
鈴木　はい。
藤原　何か、悲しい話して。
鈴木　悲しい話、ですか。
藤原　うん。すぐ済むやつ。
鈴木　そんな、簡単なやつはありません。
藤原　（笑って）せやな。

藤原、去る。去り際に松田とすれ違う。

松田　お、おお。

藤原は無視して通りすぎた。

松田　いや、ははは。
鈴木　おはよう。
松田　おはようございまーす……って、ははは。

松田も去る。インコのさえずり。それに混じって口笛が聞こえる。
佐藤夫妻が現れる。

佐藤（妻）　おはようございます。
鈴木　おはようございます。
佐藤（妻）　昨日は大変でしたねぇ。
鈴木　ええ。
佐藤　やあ、おはよう。
鈴木　ご出勤ですか。
佐藤　休みです。
鈴木　え。
佐藤　お正月ですよ。
鈴木　お早いですね。
佐藤（妻）　ええ。
鈴木　目覚め良かったんですか。
佐藤（妻）　ええお天気ですから。

鈴木、少し笑う。

鈴木　まだ日は昇っちゃいませんよ。
佐藤　いや、今日は晴れます。いいお天気になりますよ。
鈴木　お二人はなぜ僕にかまうんです。
佐藤　え。

鈴木　佐藤さん、貴方が昨日言った事もウソばかりだ。

佐藤　は？

鈴木　奥さんは、帰省してない。

佐藤　いや、すいません。

鈴木　なぜ、そんなウソをつくんです。

佐藤　あこがれ、ですか。

鈴木　え。

佐藤　お近づきになりたかったんです。貴方と、話がしたかったんです。

鈴木　……。

佐藤　なにしろ、有名な方ですから。

鈴木　それはどうも。

佐藤　私は貴方を怒らせてしまうかも知れません。怒らせるまではいかなくても、不愉快にさせてしまうかも知れない。私はね、こんなだから、人から誤解を受けやすいんです。私の事、どう思われましたか？　私はただ一生懸命しゃべってるだけですよ。誠意がね、伝わらないんです、私の。誠意伝わりましたか？　だからね、嘘をつきました。私はね、死ぬのは嫌です。もちろん、妻だってそうです。誰だって人の死に目になんて会いたくはありません。だからね、妻はいないフリをしました。貴方は女の人、殺すんでしょう。私の言ってる事は至極当然な事です。夫には妻を守る義務がある。いや、義務って問題じゃない。それじゃいかにも無味乾燥な話ですからね、そうじゃない、愛です。鈴木さん、貴方だって人を愛することは出来るでしょう。いや、貴方の場合、愛するって事が殺人と結び付くんなら、嫌われたってかまいません。いや、嫌いになってください。後生です。

鈴木　あこがれはどこにいったんですか。

佐藤　いや無論、あこがれはあります。羨望と言ってもいい。いいですか。貴方が私達のことをどう考えようとそれは問題でないんです。いや、問題です。生き死にの問題ですからね、それは大問題です。誰だって死ぬのは嫌でしょう。出来ればそんな事、考えずに済ませたいものでしょう。それで、どこまで話しましたっけ。私は

ね、

佐藤（妻）主人はね、つまり、

佐藤　いや、いやいや、亭主の話に途中で口をはさむなんてね、良くないです。いや、いやいや、私はこれでも男女間の問題についてはリベラルで通ってます。職場ではね。フェミニスト佐藤なんてね。お茶汲み係長とか言われちゃったりしてね。いや、申し訳ない。つまりね、亭主、女房の問題じゃないんです。いいですか、話の腰は折らないで欲しい。要点はこうです。で、こういう時、鈴木さん、どうされますか。一喝すべきですかね。うるさいとか、黙れ、とか、黙って聞いておれ、下郎とかね。時代劇好きなもんですからね。ははは。

やや間。

佐藤　何かしゃべってください。

鈴木　話の続きはどうなったんです。

佐藤　あ、そうそう。最近、妻は食事を作ってくれません。だからね、私、たくさん、たくさん、買い込んでたでしょう。あれはね、ウソじゃありません。真実なんです。エビセン、食べましたか。

鈴木　あ。

佐藤　ウソはつかなくっていいんです。エビセン、食べてないんですね。大丈夫です。あれは腐るもんじゃありません。何かの拍子に思い出してくれればいいんです。夜中に口寂しい時ってあるでしょう。テレビのくだらない深夜番組見ながらね、エビセン、ポリポリ食べてね、ああ、佐藤さんに貰ったもんだ、さんづけはおかしいですね、佐藤で結構です。佐藤のエビセン。ありそうですね、これ、佐藤のエビセン。

佐藤（妻）佐藤のエビセン。

佐藤　そう、佐藤のエビセン、ポリポリ食べるんです。ビール、ビール飲んでね。お腹も膨らんで、幸せってやつです。で、忘れてください。私の事など。

鈴木　それで。

佐藤　それで、話はおしまい、あ、違いますね、まだ

大事な話が残ってます。池田屋事件の話、覚えてますか。

鈴木　ええ。

佐藤　やっぱり。

佐藤（妻）　ほらね。

佐藤　どうしましょう。

佐藤（妻）　話してあげたら。

佐藤　池田屋事件、嫌いなんです。あれ、人がたくさんたくさん死ぬでしょう。昔のドラマはその、なんですな。リアリティを追及しすぎるというか、陰惨でしょう。昔の役者ってのは、こう、目がギラギラしてるでしょう。懐かしい！　ありゃ大変な事です。今の役者はダメ、目が死んでますな、ええ、時代劇には向いちゃいません。しかしね、怖いでしょう。子供心には。あの目は。周りにいないでしょう、そういう人。襖にね、血が飛ぶんです。勤皇の志士が何人も死ぬ訳です。あれ、新選組には死人が出ないんです。おかしな話じゃありませんか。うちにもね、襖があったんです。昔は今ほど、個人のプライベートなんてありゃしませんから、襖です。襖一枚って訳です。破るとね、よく叱られました。押し入れに入れられました。子供は泣きますね。泣き疲れて眠る訳です。目が覚めてもやっぱり、押し入れの中です。鍵なんてありませんから、襖を開ければいいんです。けど外がどうなってるかわかりゃしないのに、開ける事なんて出来ません。池田屋事件が始まってたらどうするんです。血に飢えた奴は見境いがありませんからね、十人殺すのも二十人殺すのも一緒です。だからね、人殺しってのはよくありません。人を殺すって感覚が無くなっちゃう訳です。何人やっつけるかってゲームになるんですから、でもやっつけると殺すってのは一緒なんです。おわかりですか。

鈴木　ええ。

佐藤（妻）　気が済んだ？

佐藤　はい。

インコのさえずり。

佐藤　鈴木さん。

鈴木　はい。

佐藤　じゃあ、私の話、かいつまんで説明してください。

鈴木　え。

佐藤　私、誠心誠意お話ししました。おわかり頂いたとは思うんですが、念には念をと申しますか、説明して頂きたいんです。鈴木さんが私の話をちゃんとご理解頂けたかどうか。

鈴木　……。

佐藤　あの、もう一度、最初からお話ししましょうか。私、何度でもお話しできます。妻はね、これでも、大学出で、心理学なんてものをかじってましてね。私の話をちゃんと聞いてくれます。的確なアドバイスも忘れずにね、だから、私、自分の本心ってものを包み隠さず話すことが出来ます。ほら、最近じゃあまり腹を割って話すことって無いでしょう。腹を割るってのはあまり響きのいい言葉じゃありませんね、切腹を連想しませんか、すると最後は首を切られるわけですね。あれは惨い。惨い死に方ですが、人道的な処刑法であると何かの本で読みました。ええ、首吊りや、電気椅子なんてものより、よっぽど痛みが少ないって、私は嫌ですよ、どれも、そんな事、考えたくもありません。

鈴木　佐藤さんは、僕が犯人だって考えてる。

佐藤　あ、いえ、そんな事は、言ってません。

鈴木　それから、佐藤さんは、奥さんが怖い、殺されるのは嫌だ、殺されるくらいなら殺した方がましだ、かいつまんで説明したら、そんなとこですか。

佐藤　と、考えてる訳ですな。

鈴木　え。

佐藤　つまり、殺されるくらいなら殺した方がましだと。

佐藤（妻）　ほらね。

佐藤　やっぱり。お前の言う通りだ。

佐藤（妻）　でしょう。

鈴木　僕が、殺される？

佐藤　そう、そうです。

鈴木　誰に？

佐藤　誰にって私じゃありません。私じゃないって事は確かです。もちろん、妻だってありえません。妻は貴方に好意を持ってます。亭主としては少し複雑な気分ですが、私は妻を信じてます。妻は、

鈴木　誰に殺されるって。

佐藤　話の腰は折らないでって言ったでしょう。

鈴木　え。

佐藤　いや、いやいや。それでも私は貴方に殺意なんてものは感じません。

鈴木　僕は、殺される？

佐藤(妻)　そう。

鈴木　なぜ。

佐藤(妻)　なぜって、思たことない、これまで。

鈴木　……。

佐藤(妻)　この団地、人いっぱいいるでしょう。その中の一人ぐらい、鈴木さんの事、殺したろって考えてる人いると思うの。

鈴木　誰が。

佐藤(妻)　それがわかってたら、こんな事にはならんでしょう。一人で済むやない。

鈴木　殺されるくらいやったら殺してやるって。

佐藤(妻)　私はね、本能ってものを信じてるの。

鈴木　本能？

佐藤(妻)　人が何、考えてるかなんてわからんでしょう、せやから探りあう訳でしょう、鈴木さんは心の中で人殺した事ない？

鈴木　いえ。

佐藤(妻)　正直に答えて。

鈴木　僕にはわからない。

佐藤　鈴木さん、貴方ね、さっきからひとごとみたいにしゃべってるけど、私らはね、貴方の事を言ってるんです。

佐藤(妻)　黙って。

鈴木　一つ。

佐藤(妻)　何。

鈴木　わかってる事があります。

佐藤(妻)　そう。

佐藤　何が何が何が。

鈴木　僕を怒らせてるんですか。
佐藤　いいですか、私は貴方なんか怖くない、怖くないです。
鈴木　はい。
佐藤　わかりゃいいんです。
佐藤（妻）何？
鈴木　カマキリの話、覚えてますか。
佐藤（妻）ええ。
鈴木　ふと、考えたんです。カマキリはオスが誘ってるのか、それともメスが誘ってるのか。
佐藤（妻）それで。
鈴木　どっちだと思います？
佐藤（妻）さあ。鈴木さんはどっちやと思うの。
鈴木　メスが誘ったんだと思います。
佐藤（妻）積極的やねぇ。
鈴木　お弁当、作ったんですよね。
佐藤（妻）ええ。
鈴木　奥さんが誘ったんでしょう。

佐藤（妻）、笑い出す。

佐藤（妻）カマキリの話、人間の話。
鈴木　だから、
佐藤（妻）順番の話？　セックスとお弁当とそれから、
鈴木　……。
佐藤（妻）カマキリって、気持ちいいんかしら。
鈴木　は？
佐藤（妻）だって食べられるのわかってててする訳でしょう。
佐藤　食べられる、私が？
佐藤（妻）別にあんた食べようて思ってないの。
佐藤　じゃあ鈴木さん……が私を食べる。
鈴木　食べません。
佐藤（妻）やっぱり、一緒の事なんかしら。何もかも一緒やったことがわかれたんかしら。ほら、カマキリは何も考えてへんわけでしょ。私はね、ちゃんと順番を考えるの。セックスは、なんて言うの。この人おびえるしね。
鈴木　じゃあ。
佐藤（妻）もうわかってるんでしょう。

佐藤、バナナをもりもり食べてる。

鈴木　もう一つ。

佐藤（妻）　何。

鈴木　どこに責任ってものがあるんでしょう。

佐藤（妻）　責任って？

鈴木　人を殺した事の責任。

佐藤（妻）　責任なんてないのよ。たまたまこの人はあの人に殺されてしもたけど、別に反対でもおかしない訳でしょう。藤原さんのダンナさんが山田さん殺しても、説明はつく訳でしょう。

鈴木　……。

佐藤（妻）　原因は何でしょう？　痴情のもつれですって、片付くでしょう。そしたら鈴木さんもああ、そうかって安心するでしょ。

鈴木　説明がつかないときはどうするんです？

佐藤（妻）　そういう時はなんて奴だって社会が糾弾するの。それから理由を考えるの、周りの人が。

鈴木　僕にはわからない。

佐藤（妻）　そりゃ当たり前でしょ。本人がわかってたら、殺したりはせんのよ。理由も無いのに。

鈴木　理由？

佐藤（妻）　そう。理由。はっきりした事はね本人にもわからんもんなの。

鈴木　僕がもし、

佐藤（妻）　何。

鈴木　もし犯人だとしたら、きっと後悔するんじゃないかって。当たり前ですけど。

佐藤（妻）　それは気持ち良かったからでしょ。

鈴木　え？

佐藤（妻）　気持ち良くなかったの？

鈴木　いや、あの、

佐藤（妻）　心の中で何か良くない事考える時、すっきりするでしょ。すっきりするとね、頭の中空になるでしょ。空になったらなったで、別の事考えるでしょ。

鈴木　はい。

佐藤（妻）　少し寂しくなるでしょ。死んでしもた人はそれでおしまいになるけど、私は残される訳でしょ。

鈴木　私？

佐藤（妻）　そう、私。

鈴木　僕は……。

佐藤（妻）　寂しいの？

佐藤　寂しくなんかないさと私は言いたい訳です。冬枯れの夜、駅のホームに降り立てば、私と同じ風体をした男達の家路を急ぐ姿があります。皆、この団地に消えていきます。その姿が一人欠け、二人欠けても、私は寂しくないさと言いたい訳です。血に染まった池田屋の障子が風にガタガタ揺れながら、確かにここに志士達がいたことを主張する訳です。鈴木さん、ここは昔、神社だったと言いましたね。

鈴木　はい。

佐藤　そこに鳥居があった。

鈴木　ええ。

佐藤　周りは？　その周りはどうでした？

鈴木　森がありました。

インコのさえずり。

佐藤　私はね、私は鈴木さんを応援している訳です。

鈴木　ええ。

佐藤　私は例えば、この自転車みたいなものです。わかりますか？　私は池田屋事件をテレビの画面で見る訳です。彼らと知り合いって訳じゃありません。いいですか、私、私は、寂しくなんかないさと言ってるんです。

鈴木　繰り返してみましょうか？

佐藤　ええ。

鈴木　僕が犯人ですよ。

佐藤　違う。違うでしょ。私の言ってるのは、

鈴木　自首します。ここ、掘り返してもらいます。

佐藤　私はどうなります。

鈴木　どうなるんです？

佐藤（妻）　どうして欲しいの？

佐藤　……。

佐藤（妻）　私はあなたをどうもせんのよ。わかる？　愛だの恋だのとは違うの。何もしたくないの、もう。

やや間。

佐藤　森はどこまで続いてるんでしょう。

鈴木　え？

佐藤　ちょっと見てきます。もうじき日が昇るでしょ。お正月でしょ。初日の出まだ見てないんです。

佐藤、去る。

やや間。

佐藤（妻）　掘り返すん？　ここ。

鈴木　困りますか。

佐藤（妻）　なんで。

鈴木　いえ。

佐藤（妻）　でもね、困る人はいっぱいいると思うの。

鈴木　そうですか。

佐藤（妻）　私は別に困らんけどね。

鈴木　すっきりするでしょう。きっと。

佐藤（妻）　（笑って）掘り返して、埋め直して。そしたら鈴木さん何埋めるの？

鈴木　僕が、ですか？

佐藤（妻）　うん。

鈴木　樹を植えます。

佐藤（妻）　え？

鈴木　草や花なんてのは枯れるでしょ。

佐藤（妻）　そやね。

鈴木　一つ聞きたいんですけど。

佐藤（妻）　何。

鈴木　想像してるのと、実際やってみるのと、どっちがいいと思います？

佐藤（妻）　何の話。

鈴木　別に、何の話でもいいんです。

佐藤（妻）　心理テスト？

鈴木　そう。だからあまり考えずに。

佐藤（妻）　がっかり、かなあ。

鈴木　え。

佐藤（妻）　どっちも。

鈴木　そうですか。

佐藤（妻）　寂しくなんかないさ。

鈴木　自首するんですか？

佐藤（妻）　何の話？

鈴木　いえ。
佐藤（妻）　ねぇ、一つ約束してくれる？
鈴木　え？

山本、大きなスコップを持って立っている。
後ろから、山本（娘）、駆けてくる。

山本（娘）　お父さん。

遠雷。

佐藤（妻）　雷？
鈴木　はい。
佐藤（妻）　雨ふるんかしら？
鈴木　どうでしょう。

山本、掘り始める。

佐藤（妻）　そう言えば。
鈴木　はい。
佐藤（妻）　掘り返してみたら出てくるかもね。
鈴木　え。
佐藤（妻）　冷めたい失くしたビー玉。
鈴木　きっと。
佐藤（妻）　何。
鈴木　もし出てきたとしても、汚れちゃって、わかりゃしません。砂利や石ころと一緒ですよ。
佐藤（妻）　そうなん。
鈴木　ええ、がっかりってやつです。
山本（娘）　お父さん、そこと違う。
佐藤（妻）　私ねぇ。
鈴木　はい。

インコのさえずり。

佐藤（妻）　笑わんと聞いてくれる？
鈴木　ええ。
佐藤（妻）　神様っておらんの？

鈴木、少し笑う。

佐藤（妻）　私はね、おると思うの。
鈴木　ええ。
佐藤（妻）　何言うてんねんって思てる？
鈴木　いいえ。

佐藤（妻）神様はねぇ、人間が何考えてるかなんか、知ったこっちゃないのよ。

山本、大きなゴミ袋を引っ張り出す。

佐藤（妻）、振り返り、

佐藤（妻）あっ。

山本（娘）お父さん、それ違う。私らのはとなり。

佐藤（妻）小山さん。

山本、引きずって歩き出す。

後を追う山本（娘）。

佐藤（妻）あそこねぇ、スイートピー植えてたんよ。

鈴木　はい。

インコのさえずり、複数。

佐藤（妻）なんか。

鈴木　何ですか。

佐藤（妻）ジャングルみたいやねぇ。寒いけど。

鈴木　約束ってなんですか？

インコのさえずり。ゴミ捨て場に明かり。部屋の中のように。

半裸の高木と前田。

高木（声）嫌な夢見たんや。

前田（声）どんな。

佐藤（妻）あれ割って欲しいねん。

鈴木　あれ？

佐藤（妻）目玉、全部。

鈴木　全部？

高木（声）夢ん中で、俺、人の心読めるようなんねん。なんでも考えること全部。

前田（声）全部？（少し笑う）

佐藤（妻）目つむってみて。聞こえるでしょ、いろんな声。目を閉じたら聞こえてくる声。あんまりたくさんで、私は何言ってるんかわからへんけど。聞き分けることはね、でけへん事やと思うの。遠くで、近くで、ただ聞こえてくる。私はそれが一体何を意味してるんかわからへんかったん。今もわからん。でもね、わかりようが無

いって事はわかるの。聞いている私がいるって事はわかるの。わかったところで、何の解決にもならない。けどね、

前田（声）私も。

高木（声）うん。

前田（声）どんなん？

二人の部屋はゆっくり暗くなる。

「こやまさんちのにわ」にまぶしく光の筋が降り注ぐ。

佐藤（妻）寂しくなんかないのよ。それが人間やからとか、そんなんやなくて、私達は私なの。一人とかじゃなくてね。鈴木さん。

鈴木　はい。

佐藤（妻）私は何？

鈴木　え。

佐藤（妻）心理テスト。ここはジャングルです。私は何？

鈴木　ええと。

佐藤（妻）あんまり考えやんと。

鈴木　ええと。

佐藤（妻）答えて。

ふっと、溶暗。

―幕―